
○議長（土屋清武君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午後 1時45分）

◇ 福 本 栄一郎 君

○議長（土屋清武君） 一般質問を続けます。

通告順位4番、福本栄一郎君。

（6番 福本栄一郎君 登壇）

○6番（福本栄一郎君） 通告に従いまして、ただいまから一般質問を行います。

私の質問は、町政の運営についてと教育行政についての2点であります。

町民の皆様方の暮らしの安心・安全な生活を守るため、具体的かつ満足のいくわかりやすい明確な答弁をお願いします。

町政の運営についての1点目、現在、町内では2つの医院しかなく、平時及び災害時の医療態勢の弱体化が心配されます。町民の安心・安全な暮らしを維持するため、どのような対策を講じているのかについてをお伺いいたします。

2点目、人口減少や施設の老朽化も進む中、今後の水道、温泉事業の運営はどのように考えているのでしょうか。また、町内の管工事業者も減少し、緊急時の対応はどのように考えているのかお伺いいたします。

3点目、景観ガイドラインや牛原山整備計画、なまこ壁の利活用など委託事業で多くの計画が策定されているかと思われますが、絵に描いた餅では税金の無駄遣いとなります。今後どのように展開していくのかお伺いいたします。

町政の運営についての4点目、交流拠点施設「あれあいと一ふや。」は、3月議会で管理条例を整備いたしました。が、土日に閉まっていることが多々見受けられます。多額の整備費用をかけておりますが、町民に説明できる有効な具体的計画についてお伺いいたします。

町政についての5点目です。平成28年度における空き家バンク制度やC C R C、移住・交流による活性化事業などの実施状況及び効果についてお伺いいたします。

町政の運営についての6点目です。「日本で最も美しい村」加盟の地域資源である「なまこ壁の建造物」を残すための方策といたしまして、文化財の指定や補助制度の確立をどのように進めているのかお伺いいたします。また、左官職人の養成を町として、今後どのように考えているのかを併せてお伺いいたします。

次に、教育行政についての１点目であります。子どもが地域の誇りや愛着を持つため、先人の歴史を学ぶ教育や漆喰鰻絵の体験など松崎らしい教育を展開すべきと考えますが、町、学校の取り組みについて伺います。

教育行政についての２点目、児童、生徒の減少に加え、他校の受験などにより松崎高等学校への入学者数が定員割れの状態となっております。将来に向けた地元高校の存続が危惧される中、中高一貫教育、西豆地域教育研究協議会ではどのような対策が講じられているのでしょうか。また、「賀茂地域教育振興方針」の中で高校の統廃合の問題は提起されているのか伺います。

以上、壇上からの質問を終わります。

（町長 齋藤文彦君 登壇）

○町長（齋藤文彦君） 福本栄一郎議員の一般質問にお答えします。

１．町政の運営について。①「現在、町内では２つの医院しかなく、平時及び災害時の医療態勢の弱体化が危惧されるが、町民の安心・安全な暮らしを維持するため、どのような対策を講じているのか伺います」についてです。

少子・高齢化が進行する中、町民の皆さんが安心して生活するためには、地域における医療サービスを確保することが必要不可欠であると考えております。

しかしながら、現在、町内には２つの医院しかいないため、休診となる土日や祝日、夜間といった場合には、賀茂医師会に委託して輪番制による医療体制に頼っているのが現状です。

また、救急医療の確保に大きく貢献するドクターヘリについては、昨年度、格納庫整備に対する補助を行い、本年４月に竣工し地域医療の確保に努めているところでございます。

その他に、町独自の取り組みとして、２４時間無料の電話医療相談を行ない、町が委託した業者の専門医が身体の不調や健康づくり、介護方法のことまで、きめ細かに対応しており、年間１２０件程の相談が寄せられています。

地域医療の確保は喫緊の課題であり、とりわけ有事の際の医療体制が危惧されますが、県や近隣市町、賀茂医師会など関係機関と協力しながら現在の地域医療水準を維持し、併せて有事の際の医療体制の強化も図ってまいりたいと考えております。

②「人口減少や施設の老朽化も進む中、今後の水道、温泉事業の運営はどのように考えているのか。また、町内の管工事業者も減少し緊急時の対応はどのように考えているのか伺います」

全国的にみて、どこの水道事業者でも、人口減少に伴う水道使用量の減少、水道施設の更新時期到来による多額の投資経費の増加という状況が顕著となっております。そうした中、公営

企業財政を管轄する総務省から、今後 10 年以上の投資財政計画となる経営戦略について平成 33 年 3 月までの策定が義務付けられました。

当町におきましても、平成 29 年度は、投資計画の核となる現施設の現状、更新時期、規模、方法、給水人口の変動について把握し、平成 30 年度には、経営戦略や財政計画を策定する予定となっております。

また、温泉事業の運営に当たり収益について加入者をいかに増やしていくか、一方、費用については効率化等による軽減を図っていくことが重要であると認識しております。

今後も期間限定の加入者確保に向けた取り組みを継続するとともに、収益・費用の面で効果的な経営改善を図ってまいり所存でございます。

また、水道事業における災害時対応につきましては、管工事組合との応援協定や日本水道協会静岡県支部と相互応援協定を締結しており、災害時における応急給水や施設の応急復旧の協力体制を構築しております。

③「景観ガイドラインや牛原山整備計画、なまこ壁の利活用など委託事業で多くの計画が策定されているかと思われるが、絵に描いた餅では税金の無駄遣いになる。今後どのように展開していくのか伺います」についてです。

松崎町のなまこ壁等の歴史的、文化的景観、森里海川の自然景観は町の貴重な財産であり、すべての住民の誇りとなるものです。景観ガイドラインは景観形成の基本目標・基本方針を踏まえ、景観法や関連法制度等を活用し、町と住民の皆さんと協働でこれから松崎町の景観づくりを考えていく上で、基本となる景観形成の方向性を示したもので、約 500 万円の事業費をかけて策定しました。

本年度景観行政団体への移行を目指し、地域ごとに住民の皆さんと景観ワークショップを行い十分議論をし、今後の景観計画の策定や条例制定につなげていきたいと思っております。

牛原山整備計画につきましては、平成 26 年度から 3 か年、総事業費 1420 万円かけて現地踏査や職員のスキルアップ研修、町民ワークショップ、社会実験等を行い策定しました。

計画策定にあたって、場を使う立場である町民が、実際に場を使いながら計画策定に参画すること、再整備後に町民活動を視野に入れた計画であること、町民自身が主体的に森づくりに関わること、外部の視点、場に訪れる立場を取り入れた計画であることをポイントとして進めてきました。今後も、より多くの方に牛原山を利用していただけるよう官民協働で取り組んでまいりたいと思っております。

なまこ壁の利活用については、渡辺議員の一般質問でもお答えしましたが、地方創生加速化

交付金を活用し、事業費約 1000 万円で、なまこ壁の建造物現況調査や住民参加のワークショップにより中瀬邸・伊豆文邸・旧依田邸の活用計画をとりまとめました。

なまこ壁の建造物は、「日本で最も美しい村」加盟の登録資源の一つであり、後世に残していく貴重な財産であることから保全と活用について引き続き検討してまいりたいと思います。

④『交流拠点施設「あれあいと一ふや。」は、3月議会で管理条例を整備したが、土日に閉まっていることが多い。多額の整備費をかけているが町民に説明できる有効な具体的計画について伺います』

交流拠点施設「ふれあいと一ふや。」は、国の地方創生先行型交付金などを活用し、平成 27 年度から 2 か年で総事業費約 1400 万円かけ、空き店舗を改修し、まちづくりの拠点オフィスや外部人材がワーキングスペースとして活用するためのシェアオフィスとして整備を図り、昨年 7 月 8 日にオープンしました。

オープン後からこれまで施設利用者は 500 名を超え、静岡大学、常葉大学のフィールドワークやコニカミノルタの企業研修、青パパイアのデモイベントなどが行われ、施設管理につきましては、地域おこし協力隊が対応してきました。

地域おこし協力隊の活動により、やむを得ず施設を閉めておかなければならないこともありますが、起業者の誘致を図る会社機能の地方への分散化オフィスや町民の活動スペース、観光客が気軽に立ち寄れる場という目的があることから、開かれた場所となるよう、対応を検討してまいりたいと考えております。

⑤「平成 28 年度における空き家バンク制度や C C R C、移住・交流による活性化事業などの実施状況及び効果について伺います」についてです。

町では、平成 25 年度から町内における空き家の有効活用と定住促進による地域の活性化を図ることを目的に、物件情報の登録と提供を行う空き家情報バンク制度を始めております。

空き家情報バンクの物件につきましては、情報提供いただき登録した 5 軒を公開しており、空き家情報バンク利用者登録をしている人は、平成 29 年 3 月末現在で 24 名となっております。

C C R C、生涯活躍のまち構想につきましては、昨年度から県の「伊豆半島生涯活躍のまちづくり推進会議」の中で取り組みが検討されてきました。平成 29 年度に「アクティブシニアが活躍するクアオルト滞在型保養地のまちづくり」として、元気な中高年を中心に住民も観光客も町を歩いて楽しめる仕掛けづくりのモデル地域に松崎町を中心とした伊豆南部地域が決まりましたので、県及び関係団体等と連携して事業実施してまいります。

移住定住促進対策につきましては、これまで移住・定住ガイドブックの作製などを行い、平

成 28 年度は町と関係団体で協働し、農業体験モニターツアーを実施したところでございます。

本年度予算では、移住定住業務委託で 125 万円を計上し、首都圏移住相談会における PR、移住体験ツアーの実施などにより移住希望者が松崎町を訪れる回数を増やすことで、移住者の増加につなげてまいります。

⑥『「日本で最も美しい村」加盟の地域資源である「なまこ壁の建造物」を残すための方策として、文化財の指定や補助制度の確立をどのように進めるのか。また、左官職人の養成を町としてどのように考えているのか伺います』についてです。

なまこ壁の建造物は、町の歴史・文化を象徴するものであり、「日本で最も美しい村」加盟の地域資源の一つとして、保存・継承していくことは重要であると認識しております。

なまこ壁の保存・継承につきましては、景観ガイドラインや昨年度実施した「美の漆喰文化を育むまちづくり事業」を踏まえて、今後、策定予定の景観計画に盛り込んでまいりたいと考えております。特に、景観計画や文化財の指定にあたっては、いろいろな制限も出てくることから、ワークショップなどを通して、町民の皆さんと十分に議論してまいりたいと思います。

なお、議員ご質問のとおり、なまこ壁の保全・継承をしていくうえで、左官職人の養成は重要であり、総合戦略においてもモノづくり技術者育成を掲げているところでございます。

町では左官技術の継承や街並み整備、誘客を目的として平成 6 年度から伊豆の長八美術館から役場周辺で「なまこ壁技術伝承事業」を実施し、これまで 690 メートル余りを施工しており、また、本年 3 月に落成した松崎幼稚園の外壁には、伝統的な建築様式のなまこ壁を取り入れ、左官技術の継承を図ったところでございます。

なまこ壁は、町を代表する資源であることから、今後も施工場所を検討しながら、継続して実施してまいりたいと考えております。

2. 教育行政について。①「子どもが地域の誇りや愛着を持つため、先人の歴史や漆喰鰻絵の体験など松崎らしい教育を展開すべきと考えるが、町、学校の取り組みについて伺います」についてです。

「松崎の教育」の 8 つの方針の中に『「生きる力」を育み、郷土に根づいた子どもの育成を目指します』という方針があります。その中で郷土について学ぶ機会を設け、故郷を愛する子どもたちを育てることがあげられ、その必要性は十分認識しているところでございます。

松崎小学校では、生活科や総合的な学習の時間の中で、学年ごとに、なまこ壁や棚田、ジオなどの地域資源や郷土の偉人に関する学習を行うとともに、クラブ活動として 4 年生から 6 年生からなる「ものづくりクラブ」の児童が「漆喰こて絵」の体験を行っております。

また、地域おこし協力隊が中心となり実施している「なまこ壁を未来へつなごうプロジェクト」では、児童・生徒がなまこ壁の学習を行うとともに、清掃作業を行っております。

地域への誇りと愛着は、町に関心をもち、体験や活動をすることにより、醸成されると思っておりますので、今後も学校と連携して、郷土に根づいた子どもの育成を図ってまいります。

②「児童、生徒の減少に加え他校の受験などにより松崎高等学校への入学者数が定員割れの状態となっている。将来に向けた地元高校の存続が危惧される中、中高一貫教育、西豆地域教育研究協議会ではどのような対策が講じられているのか。また、「賀茂地域教育振興方針」の中で高校の統廃合の問題は提起されているのか伺います」についてです。

平成 29 年度の松崎高校の入学者数は、101 人となっており、募集定員 120 人を下回っている状態が何年も続き、今後、少子化に伴い更なる入学者の減少が見込まれ、議員ご心配のとおり存続が危惧されているところでございます。

西豆地域の町、議会、教育委員会、小・中・高の教育関係者からなる西豆地域教育研究協議会では、教育課程の共同編成や地域の特色を踏まえた教育活動の推進、郷土愛の育成、地域が求める人材育成などを推進しております。

特に少子化対策として、平成 20 年度から「西豆の子は西豆で育てる」を合言葉に、松崎高校と西豆地域の 3 中学校、松崎中学校、西伊豆中学校、賀茂中学校との間で連携型中高一貫教育を進め、西豆学や各種スポーツ教室、中高合同美術教室の支援、交流授業・授業研究会を実施し、西豆を支える人材育成を行っているところでございます。

本年 4 月開催された研究協議会の際に、私は「松崎高校存続のために 1 学年 120 人を維持することが必要で、そのために学校の魅力化、学校の価値を高めていく必要がある」と申し上げたところであり、今後も地域の皆さまのご理解、ご協力もいただきながら、松崎高校の存続に向け、努力してまいります。

なお、平成 29 年 2 月に賀茂地域広域連携会議で策定された「賀茂地域教育振興方針」の中では、高校の統合の問題は提起されておらず、広域連携会議の平成 29 年度の取り組みとして、地域による高校の魅力化を図るため、学校、PTA、役場、教育委員会などからなる協議会を設置することを検討しております。

以上でございます。

○6 番（福本栄一郎君） 一問一答をお願いします。

○議長（土屋清武君） 許可します。

○6 番（福本栄一郎君） いま、町長の方からいろいろご説明がありましたけれども、まず、最

初、町政の運営の中で、松崎町の中には医院が2つしかありません。伊豆半島の地図を広げても西海岸、旧戸田村からずっと松崎までで入院するところが西伊豆病院しかありませんよね。こういった場合は、我われの西海岸で安心・安全なことを、暮らしていくには、それぞれの自治体が、伊豆市、西伊豆町、わが松崎町を考えるならば、固有名詞でしょうけれども、菊地医院さんがもう廃業になっている。実際2つしかありません。こういった場合に、先ほど町長が輪番制、賀茂医師会と相談して輪番制とか、ドクターヘリ、それから無料電話相談と言いましたけれども、すぐに行ける、ドクターヘリは、これは医者が要請しなければ伊豆の国市から飛んで来ないですよね。まして、ほかに出ていけばもう来ないです。すぐに行ける近くの病院をつくってもらいたい。一人の先生を呼ぶというのは大変なことです。その点について賀茂医師会に町長としての要請はしたでしょうか。お願いいたします。

○町長（齋藤文彦君） 本当の当町の問題点として、入院できる病院がないことや小児科、婦人科、精神科医等の専門医が近くにいないこと、また、夜間救急や災害時などで町内の医院だけでは対応できないこと、また、医師の高齢化などがあって非常に難しい問題を抱えているわけでございます。

菊地医院さんもなくなりまして、非常に心配しているわけですがけれども、賀茂医師会とは連携をとりながら整備していくことが大切であると話し合っているわけですがけれども、なかなか医師を松崎町に呼ぶということはできないわけですがけれども、1市5町でもっている下田メディカルセンターもこのところなかなか評判がいいと聞いていますので、下田メディカルに何かあったらすぐ行けるような体制とか、順天堂病院に行けるような体制を作っていくことが大切だなということは賀茂医師会の人たちと結構いろいろ話をしています。

○健康福祉課長（新田徳彦君） 実は、昨晚、賀茂地域医療構想調整会議ということで、下田で会議がありまして、それに参加してまいりました。

その中で、賀茂医師会、あと賀茂郡内の主だった病院の先生方、保健師、歯科衛生士、皆さんが来まして、いろいろ協議をしたわけです。

主には、本年度策定予定の第8次静岡県保健医療計画の策定ということで、それを今年度作っていきましようということで話をしたわけですが、その中で、一番問題となるのが、やはり救急医療の面が大変だよねというような意見が出まして、そういった意見はやっぱり皆さん一致したような意見でございました。

今回、その第8次の計画の中で、賀茂圏域でまずやらなければならないこと、困っていること、そういったものを洗い出しながら、今後進めていきましようということになってきました

ので、今後、議員がおっしゃられた救急対策の関係なんかも議論がされていくものと思われま
す。

○6番（福本栄一郎君） 私は、ただ地元先生を置いてくれということ。ドクターヘリを呼ぶ
のも消防署じゃないでしょう。医者が自ら要請するんでしょう。我われ一般人はもちろんドク
ターヘリ来てくださいますといっても来ないです。消防署だって、ドクターが頼んで要請するで
しょう。その辺で将来を見越して、かなりもうあとの2人の先生もかなりの年配だと思うんです。

ですから、それを、若手に限らず医者と呼んでください。そのために町長として、行政とし
ての要請を県なり国なり、あるいは大学の医学部あたりへと交渉したらどうでしょうかという
ことです。

それと、西伊豆町をみますと、安良里診療所、田子診療所がありますよね。ましてや安良里
と田子は新しくなりましたよね。それと入院施設の西伊豆病院があります。

我われは、外部を越えて行かなければならない。ましてや地震、津波、いつ山崩れがあるか
わからない。そういった場合には、町内で診なければならぬ。下田はメディカルという道は
ありますけれども、そういった場合に、一つでも多く、西伊豆町はそれなりに入院施設もあり
ますし、医療が充実しています。ところが松崎町は2つの医院があるけれども、入院はできな
い。できなくなっちゃった。あと、頼るのは、下田メディカル、1市5町ですか、やっている。

ただし、町長、これは、問題が、この新聞ですよ。高齢化率、松崎町が43.8パーセント、後
期高齢化率が24.0パーセント、この10年のあいだに約半分になっちゃった。65から75まで。

さらに、75から85までをみたらどうなるか。我われは絶えず不安を感じているんですよ。
病院がないと。しかも車の運転もできなくなります。車の運転が、バックギアを間違えたり、
前進をふんだり、高齢者の率が多い。かたや警察の方では、免許証を返納してください。社会
的にも容認されてきて、優遇措置まで出ているんですよ。その前には、ゴールド免許であれば、
任意保険も多少なりとも割引く。それが、いつまでも我われは運転ができるかどうかというこ
とを考えている。特に、眼科、目が見えないと誰かに頼んで乗せていってもらわなければなら
ない。その眼科ですら、そこの宮内のところに週に何回か来ますけれども、やはり下田から先
生が来ます。それ以外に自分で歩いて行けるところはないということ。

ですから、西伊豆町みたいに安良里診療所とか田子診療所みたいな考え方はないでしょうか。

○町長（齋藤文彦君） そう簡単な問題ではないわけですがけれども、先ほど課長の方からありま
したけれども、本当に賀茂医師会や近隣市町と連携をとりながら、医師などの人材資源や医院
施設などの物的資源を整備していくことが大切であるとわかっているわけですがけれども、なか

なか進まないわけですから、努力していくしかないなと思っています。

○6番（福本栄一郎君）　だんだん歳を取ってくると、安心は、病院のそば、あとはスーパーのそば、これは日本全国だれでも思っている。それがだんだん、だんだん過疎化でみんな撤退。

一説によりますと、賀茂郡はそういった意味では、非常に観光地として来るのは風光明媚で料理もおいしい、泊まる所も多々ある。我われの、定住している人間が、生まれ育った人は安心して老後を迎えられるかということをよく考えてもらいたいと思います。

その辺、町長、またよろしく、強引にでもいいですから、県の方へとお願ひしたいなと、あるいは1市5町の病院組合ですか、そちらの方も願ひして、安心・安全な松崎に住みたいということを、住みよいまちづくりをお願いします。

それから、時間の関係がありますから、次にいきます。総合計画、これについては、総合計画や総合戦略は議会の、確か協議会で説明を受けたんですよ。けども、景観ガイドライン、牛原山整備計画、なまこ壁などは説明がされていないと思うんです。それから、できあがっているでしょうから、その計画書が配付はないです。その辺の配付をしない理由は何かあるでしょうか、お伺ひいたします。

○企画観光課長（高橋良延君）　質問のありました景観ガイドライン、牛原山の整備計画等については、計画書ができあがって、牛原山についても計画書ができあがってきました。

こちらについては、特に町民の方々とか議会の皆様方にはまだ配付していないわけですが、そちらの計画書の配付については、こういった形でしたらいいかは検討してまいりたいと思います。

○6番（福本栄一郎君）　これは、我われ議会の方へと、いろんな勉強もしたいし、いろんな動きも知りたいです。特に、牛原山については、私は宮内で地元であります、よく聞かれるんです。どうなっているんですか。答えようがないんです。あんた宮内でいないなあなんて。これは冗談でしょうけれども、そういったふうにも思われちゃう。聞かれた場合、我われ、私に限らず皆さんもそうだと思うんです。

多額の税金をかけています。ですから、少なくとも議員としては、説明をするだけの資料をもらいたい。できるだけ早く配ってもらいたいと思います。聞かれた場合、回答に困るんです。その辺をよく考えてもらいたいと思います。我われも一応議員として、議員活動を行っていますから、あっちこっちへ取材に出かけます。新聞記者以上に。それで、聞かれるんです。その返しが、何をやっているんですかとお叱りを受けますので、ぜひとも、多額の費用をかけていますので、皆さんの税金で。その辺を早く願ひしたいと思います。

次に、「ふれいあと一ふや。」さんの問題です。これはやっぱり先ほど町長の答弁の中でありますけれども、地元の人、静岡大学、常葉大学、コニカミノルタ等々で約 500 名、実際に地元の定住している人間が何人利用しているのでしょうか、お聞かせください。

○企画観光課長（高橋良延君） 先ほど町長の回答の中で、昨年 7 月 8 日にオープンして以来、だいたい 500 名を超える方に利用していただいているところでございます。その中で、町内、町外という形ですみ分けた統計数値というのは、いま整理はしておりませんが、町内の方々の利用については、先ほど言いました青パパイヤの特産品化を目指す町内のまちづくり団体であるとか、あと、子育てのお母さま方があそこに集まりまして、そういった居場所といたしますか、子育てのお母さま方の集いの場所というような形で、町内の方々については利用していただいていると。

あとは、先ほど牛原山の整備計画というのもありましたけれども、その中でワークショップ等々も数回開いております。そういった中で、町民の方々がそこを利用しまして、ワークショップを行っているという形でございます。

その町内、町外の、申し訳ございません。統計的な数字というのは、いま整理はしておりませんので、またこれは整理しまして、ご報告させていただきます。

○6 番（福本栄一郎君） これは、最初できるときに、確か、町長は、地域おこし協力隊の拠点施設として交代でというようなことを聞いた覚えがあるんです。実際、土日が閉まっている。どういのですか。しかも、あの建物はなんですか。何も表示されていない。今までいた石井豆腐屋さんの家ですね。これは皆さんよく知っていると思うんです。実際、いま、お金をかけているが、あれは何の建物ですか、よく聞かれます。実はこういうわけで、私は説明してあげますけれども。だったら、何らかの、役場が、公共施設でしょう。いわゆる公の施設ということで条例を制定しましたよね。3 月で。

ですから、何らかの方法で表示したらどうでしょうか。松崎の役場もありますね。住民センター、よくわかるんですが、道路から見ても。

あそこの建物は何だと、どういうがですか。皆さん、オープンにして利用させた方がいいじゃないですか。その辺を考えてもらいたいということが 1 点と、何らかの表示ですよ。看板とか何か。

それと、静岡大学、常葉大学、コニカミノルタさんは何か松崎町のために何か提案はしたんですか。その辺を教えてください。

○企画観光課長（高橋良延君） ただいまの「ふれあいと一ふや。」やはりあそこが当然町民の方

も観光客も、本当に気軽に利用できる施設であるというのは、一つの大きな目的であるわけですので、そこで何かやっているか、あるいはその敷居が高いよでは困りますので、今の表示のところについては、そこについては、検討させていただきたいと思います。要するに、あそこが何の施設かということがわかるような形で、今後、そういったディスプレイを含めまして、内部で十分検討してまいりたいと思います。

あと、静岡大学、常葉大学の関係で、昨年、そこを使ったフィールドワークですね。松崎町のまちを歩いて、松崎町における課題解決のために学生がそこで話し合ったわけですが、けれども、こちらについては、常葉大学については、防災講座ですか、そういったものをそこで開催したというようなことで、そこで提案が、どんな提案がされたかどうかということについては、ちょっと私は、いま、資料として持ち合わせておりませんが、常葉大学については、防災の関係ですね。実際に、まちを歩いてですとか、そういった形で、防災関係についてのフィールドワーク、防災講座を行ったという形でございます。

あと、静岡大学については、こちらは、造形学部の方が静岡大学では町の方に来まして、造形学部ですので、まち歩きマップですとか、そういった形の利用、そういったことで、実際にまちを歩いて、そういった、造形学部ですので、美術系の生徒ですので、まち歩きマップが作成できないかとか、そういったことで利用したというようなことで聞いております。

○町長（齋藤文彦君） 私は家に帰る時は必ずあの「とーふや。」のところを通って行くわけですが、電気が点いて若い人たちがいろいろやっているのを見ると、うれしくなるわけですが、地域おこし協力隊も常時いるわけにはいきませんので、いる時には、結構集まってやっているわけですが、やっぱり4月に11団体とか、5月に8団体の利用があってということがあるわけですが、本当に毎日あそこで何かワイワイ、ガヤガヤやりながら、なんか松崎の元気印が集まっているような形になればいいなと思ってやっているわけですが、まだ、宣伝が行き渡らないということもあると思うんですけれども、あそこはせっかく作ったわけですから、うまく利用できるように、いま、課長が言いましたけれども、町の方でもやっていきたいと思っています。

○6番（福本栄一郎君） 静大とか常葉大学の提案、これは、だから、町民に、どういった提案があったかという、少なくとも、「ふれあいとーふや。」のところは莫大な金をかけています。維持費もかかっていますよね。いろんなコピーとか、いろんなファックス等々があります。

そのためにも、どういう提案があったかというのは、広報まつざきがあるでしょう。毎月発行している。中間的にはお知らせ版というものもありますよね。その辺でPRしたらどうでしょ

うか。それと同時に、私は、ちょっと提案しますけれども、せっかく大学生が来ている。2016 私のマイドリームというのがきていますよね。中学生が。その人たちにも配ったらどうですか。私はまだ 14、15 の考え、お兄ちゃん、お姉ちゃんの考え方はどういうふうになっているんですか。よそから見た松崎町、この辺を示すべきじゃないですか。そうすれば、夢がまた膨らむじゃないですか。今度は 2017 もあるでしょう。マイドリーム。これから松崎を、日本を背負っていく若者ですよ。その辺の考え方はどうですか。時間がないから端的に教えてください。

○企画観光課長（高橋良延君）　そうですね。いま、議員のおっしゃったことは、一つの提案で、そちらの方は、当然フィードバックを住民の方々にもしていくのは、ある意味当然であろうかと思しますので、学生方のそういった結果ですね。あるいは提案等があったことは広報なり、別の形で可能であれば、皆さん方に広報、周知してまいりたいと思います。

○6 番（福本栄一郎君）　それはぜひともお願いします。

それから、次に、移住・交流事業はどこに委託して、何をやったんですか、教えてください。

○企画観光課長（高橋良延君）　移住・交流事業の業務委託ということで、先ほど町長が答えましたのは、本年度 29 年度に 125 万円を予算で計上してあるところでございます。

こちらにつきましては、既に委託の方は進めておりまして、松崎町の移住・交流関係の団体でありますさとづくり総合研究所というのがありますけれども、そちらの方と委託契約を結んでおります。以上です。

○6 番（福本栄一郎君）　それは、委託先。それとどう繋がったんですか。移住・定住に、今までの事業の中で。

○企画観光課長（高橋良延君）　今のは、平成 29 年度の事業ですので、これは 29 年度が終わってから、どんな成果が出たかというのがわかるものでございます。

その前に、平成 28 年度ということで、農業体験のモニターツアー、こちらの方を、移住・定住の関係で実施したところでございますけれども、昨年度合計 7 回実施いたしまして、44 名の参加をいただいたところでございます。

この方々で、その後松崎町に移住・定住をすれば、大きなこれは成果になるところでございますけれども、現在のところその参加者において松崎町に実際に移住したという方はおりませんけれども、少なくとも、こういった方々が松崎町に興味を示して、来ていただいたということでございます。

○町長（齋藤文彦君）　元の糸川荘をさとづくり総合研究所がいろいろやっているわけですが、外国の方も結構泊まっていて、私のところにカヌーを貸してくださいとかなんとか結構

来ていますので、松崎町に泊まりに来ている方がたくさんいるわけですがけれども、これが本当に移住・定住に結びつくかというのは非常に難しいところがありますけれども、ただ、来てもらわないことにはどうしようもありませんので、このさとづくり総合研究所はそれなりにがんばってやっているのかなと思うところでございます。

○6番（福本栄一郎君） これは、総括的に町政の運営についてですがけれども、町政について①から⑥までありましたけれども、⑤まででいいです。要するに、安心・安全なところで病院を来てください。そして、空き家バンクを入れてますから、移住・定住を「ふれあいと一ふや。」で検討しています。よそから呼んでください。人口増に繋がるということです。このままじゃ衰微していきますよ。ここに、町長が談話で、伊豆新聞でついに 7000 人を割り込んだ。

だから、これをストップするためには、安心・安全で、病院に来てもらって、安心・安全であって、それから、空き家バンクがだんだん増えてくるでしょう。そういう人を呼び込む、そのための拠点施設が、まさしく「ふれあいと一ふや。」施設じゃないですか。莫大な金をかけて。その辺をよろしくお願いします。

それで、時間もないものですから、左官職人の養成はどういうふうに考えていますか。

○町長（齋藤文彦君） 左官職人の養成といっても、左官屋さんの、松崎町に住んでいる本当に左官屋さんの仕事がないわけで、左官屋さんとしての仕事というのは、ほとんどないような感じだと思うんですがけれども、養成というのは直接やっていないわけですがけれども、こっちで仕事を作れといってもなかなかできませんので、非常に難しいところがあります。

ただ、松崎町は入江長八が生まれたところということで、左官、左官と言われているわけですがけれども、その人たちがいきるようにするというのは並大抵のことではないので、仕事をつくることも非常に難しいと思いますので、何かいいアイデアがあったらお願いしたいなと思うところです。

○6番（福本栄一郎君） 時間延長をお願いします。

○議長（土屋清武君） 5分延長します。

○6番（福本栄一郎君） なまこ壁建造物活用アイデア発表、町内で約 190 件のなまこ壁が、これはいいですね。町長がやりました「日本で最も美しい村」の3つの要素ですね。棚田、桜葉、なまこ壁という地域資源です。これがあることはいいんですがけれども、これをどういうふうに維持していくか。

左官組合さんがいなければ、誰ができる。誰ができるんですかということなんです。それで、

ましてや先ほどの議員の質問の浜丁橋の近くの依田邸さんですか。それから旧依田邸、大沢のですね。そして諸々ある。これをどういうふうに維持していくか、我われ、私はもちろん素人だからできないです。

非常にこれが、熟練の技を要するそうです。左官屋さんに聞きましたら。単なる民家で瓦を伏せるだけじゃなくて、このなまこ壁というのは、非常に難しい。技術を要する、熟練を要するというのを聞いています。

その辺を町としては、どういうふうに考えていますというのは、わかりました。町長はどういうふうにするというのはね。また私も考えて提案しますので。

ですけれども、やはり町としての考え方です。いわゆる職人さんを養成するには非常に長い時間がかかる。その辺の町長の考え方をもう一度簡単にお聞かせください。

○町長（齋藤文彦君） 技術伝承事業でなまこ壁とか何とかをやっているわけですが、それだけではやっぱり左官屋さんは食えませんので、毎日幼稚園を建てて、なまこ壁をつくれればいいわけですが、そう簡単にはいきませんので、左官屋さんもがんばってもらわなきゃいかんかなと思っています。

ただ、先ほども何回も申しますが、やっぱりなまこ壁の建物があっても、それを保存するだけで非常に難しいので、蔵らさんみたいにそれを使ってうまく活用しながら、金を稼いで修理をしていくというような形にしていかなないと続かないと思いますので、そのような形になればいいかなと思っていますところでございます。

○6番（福本栄一郎君） じゃあ、時間の関係がありますので、教育行政、2番目の関係で、地元の松崎高等学校の存続問題です。町長も私も松崎高校のOBということなんですけれども、我われの世代は十分に、よかったです。いわゆる団塊の世代。我われが高等学校2年の時に、松高が1000人を超えたんですね、生徒数が。

今では、定員が120人切っている。先ほどの回答で、120人の募集定員に対して101人しか入らない。賀茂郡の状況も下田高校、南伊豆分校、松崎、稲取高校は全部定員割れになっています。

だけど、田方・三島の方は、それなりにオーバーしていますけれども、あるいは一緒か。これをどうしても松崎高等学校を存続しなければいけないという、我われの責務だと思うんです。

ちなみに、これがなくなった場合に、学力の低下、下田高校まで行くには、3年間で、これはちょっとバス会社に聞いたんですよ。だいたい定期、1か月、3か月、4か月だそうですよ。標準的には3か月定期を購入するそうです。しかもこれはウィークデイ定期というそうです。

土日は定期プラス 100 円で片道でくると。これが 3 か月定期で 7 万 140 円だそうです。年間が 28 万 560 円、これを 3 か年にすると、84 万 1000 円になります。

これが、例えば、1 軒の家で 2 人子どもが、例えば同時に入った場合、親の負担が大変です。

いま、社会的な問題になっているでしょう、子どもの貧困等々で。それで、親は非正規職員、非常に厳しくなっている。だから、何があっても置かなきゃならないということを我われとしては考えなければいけない。

既に、土肥高校は分校になりましたよね。それから、その前でいきますと、城ヶ崎高校ですか、それから、むこうの佐久間町の方ですか、それが県の、高等学校自体は直に県の教育委員会ですけれども、この辺の考え方、どうしても存続したい。

その西豆中高一貫教育も結構でございます。私が言いたいのは、いかにして松崎高等学校を残すか。町長、首長さん、少なくとも西伊豆町長、松崎町長あるいは下田からも来ていますよね。その辺を含めて県へと、どうしてもという活動をしたことはあるでしょうか、その辺をお聞かせください。

○副町長（指出 巖君） いま、福本議員のおっしゃったことはまさにそのとおりであります。

私たちもそのことは町長以下認識しております。

現在、賀茂郡の稲取高校から松崎高校までの定員が 520 です。そして、いま、賀茂郡下の中学 3 年生が 502 人です。

ですから、高校の定員の方が多くなっております。それだけ生徒の数が下がってきている。

それから、松崎高校の存続ですけれども、これは、このあいだ第 3 次県立高校長期計画という検討委員会が行われまして、8 月に答申を出すんだろうと思いますけれども、その中で、小規模校、特に山間部の小規模校については、特に 4 学級以下という言葉を使っておりますけれども、これから県は長期計画を立てながら、どういう高校にしていこうかということを検討して、施策にいかしていくということが出ております。

そうしますと、賀茂郡の高校というのは、現在、小規模高校を抜けているのは、下田高校だけです。あとは、南伊豆分校が下田高校にはあります。土肥高も分校になりました。田方の高校、それから、伊東城ヶ崎高校、議員がおっしゃったとおりです。それから、春野高校ですね。天竜の。あれも分校にたぶんなったんだろうと思います。

4 校ございますけれども、ただ、分校として残しますと、高等学校の専門課程の教員が揃いません。ですから、どうしても、先ほどから申されております旅費とか何かの関係を含ましめても、県立松崎高校は残さなきゃならないということは、このあいだの西豆の自治会の中でも

隣の町長、議長、副町長、副議長を含めまして、その問題が話題になりました。

そして、残す方法ですけれども、一つは、賀茂中学校、西伊豆中学校、松崎中学校と松高と一緒にしてしまうと、要するに、一貫教育の連携型一環教育をさらに発展させて、できたら、高校自体も運動部等の人数が少なくなっているものですから、そこへ中学が全部入ってしまうなら、非常に助かるという話を伺っておりますけれども、そういう方向も一つの考え方だと思います。

そして、あとは、中学校の問題になりますけれども、これは、土肥がいまやっておりますけれども、土肥は修善寺、伊豆市ですか、そこまで中学校の統合ができないものですから、あそこが義務教育学校という新しい学校の小学校と中学校を同じ校舎の中に入れてしまって、1校という形にする義務教育学校というのをつくっております。

ただし、この場合は、義務教育学校ですから、小学校、中学校の校長はおりません。義務教育学校の校長1人ということになると思いますけれども、それでもやはり将来的には専門課程が中学校の方が困るだろうと思います。

特に困るのは、松崎高校が、例えば残って分校になった場合は、専門教師の数が揃わないという非常に大きな弊害が出てきます。

当然、先ほど議員がおっしゃっていた学力低下ということは考えられるだろうと思います。

ですから、何としても残すためには、全国でいろいろ研究して成功している学校もあります。外部から生徒を募集するとか、あるいは富士市立富士高校みたいに普通学科の中に特別な学科をつくるということによって、学校の維持をして、あるいは特徴のある学校にして生徒を集めている学校もございます。

ですから、そんなことを考えながら、これから緊急の課題として、これは、当然県教育委員会あるいは高校教育課とか、義務教育課に働きかけていくことは喫急の課題だと認識しております。それをしないと、心配されることは整理されてしまうと、取り返しがつかない状態になるだろうと、それは両町ともそういう危機感は持っておりますので、なんとかしていく予定でおります。よろしくお願いします。

○議長（土屋清武君） 福本君、まとめてください。

○6番（福本栄一郎君） 時間の関係ですけれども、西豆地域教育研究協議会、これは松崎町、西伊豆町です。首長さんでそういった気運を高めてもらいたい。

それから、1市5町で組織していますね。広域連携の一環として、賀茂地域教育振興方針の中には提起されていない。こういうのを首長会議の時に提起して、なるべく賀茂郡下の存続を、

気運を高めてもらいたいということをお願いして、以上で一般質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（土屋清武君） 以上で福本栄一郎君の一般質問を終わります。

暫時休憩します。

（午後 2時40分）
